

主 題：宣教におけるパウロの決意

聖書箇所：コリント人への手紙第一 2章1－9節

皆さんが他の人に伝道しようとするときどんなことを意識し、どのように準備されるでしょうか？まず、相手が自分に対して心を開いてくれるようにと心配りをし、関心のあることを話題にしながら、福音を語って行こうとします。救いのメッセージをしっかりと伝えることができるように願って語ります。その結果は人によって様々ですから、私たちは自分の語ったことについていろいろ考え反省したりします。コリント人に対するパウロの伝道の様子から、彼が何を選択し、どのように福音を語っていったのかを見てゆきましょう。それによって、私たちも正しく福音を語るができるように、福音のメッセージを神から託された者として、その責任をしっかりと果たしてゆけるようにと願います。

困難の中にいたパウロの決意とは？

I. 不安の中にいたパウロ 2:1-3、使徒17-18章

「さて兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。」パウロは初めてコリントへ行ったときのことを思い出してこのように言っています。「弱く、恐れおののいていた」と。いつも大胆に福音を語っていたパウロがこのときは、恐れて震えていたというのです。パウロとシラスがピリピで捕らえられ牢に入れられたとき、その獄中であって神を賛美しました。心は平安に満ちていたから、周りの囚人たちも聞き入っていたのです。そのようなパウロが、コリントに来たときは、恐れと不安の中にいたのです。確かにパウロは神から特別に選ばれた人物です。彼を通して、旧約でははっきり知らされていなかった神のメッセージ、そのすばらしさを新約で明らかにしてゆくのです。多くの人が彼を通して救いへと導かれました。そのようなパウロでさえ、あるときには弱くなって恐れを覚えるときがあるのです。

パウロはコリントの人たちにもう一度そのことを思い出してほしいと言います。旧約の預言者エリヤもそうでした。彼は自分ひとりで450人のバアルの預言者に立ち向かいましたが、その後、イゼベルを恐れて逃れ、神に死を願うほどの弱気に陥ります。エリヤでさえそのようなときがあった…。

では、いったいどのような状況の中でパウロはそのような不安の中にあっただけでしょう。使徒の働き18章を見ると、1節に「その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。」と、ここからパウロのコリント宣教の様子が書かれているのですが、パウロはコリントに着いたそのとき、恐れおののいていたと言います。そのためには、コリントに行くまでのパウロの状況を見る必要があります。

パウロとシラスはピリピを去ってテサロニケへ行きます。使徒の働き17:1以降を参照してください。そこのユダヤ人の会堂でパウロは聖書から語ります。17:3-4「そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです。」と言った。彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかにも、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった。」と、何人かの人たちは彼らのメッセージを信じたのです。しかし、それに続いてこのようにあります。5節～「ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして搜した。しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。『世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行ないをしているのです。』こうして、それを聞いた群集と町の役人たちとを不安に陥れた。彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。」。信じた何人かの人たちの中に異邦人もいたのですが、それを聞いたユダヤ人がねたみにかられ暴動を起こし、パウロたちの働きを妨害するのです。そして、10節「兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤに送り出した。ふたりはそこに着くと、ユダヤ人の会堂には行って行った。」と、次にベレヤへ行きます。このユダヤ人は熱心にみことばを聞き、聖書を調べていたとあります。しかし、ここでもテサロニケのユダヤ人によって妨げられます。パウロはシラスとテモテをベレヤに残したままアテネへと連れて行かれるのです。17:16から、パウロがアレオパゴスでまことの神について、また、福音を語っている様子が書かれています。アテネの人たちは「新しい教えがどんなものか」関心をもちますが、パウロが語る福音を聞いてどうだったか、「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、『このことについては、またいつか聞くことにしよ

う。』と言った。」と、これが彼らの反応でした。パウロは彼らの中から出て、アテネを去りコリントへ行くのです。このような状況を見るわけです。

この当時、伝道の大きな障害となっていたものがありました。それは民族間での違いから起こることです。

1) ユダヤ人の誤った宗教感情です。ユダヤ人たちは十字架にかかった救い主を信じようとしないう、まちがったメシヤ観をもっていたのです。彼らが望んでいたのは大きな力と奇跡をもって、自分たちの国をローマの圧制から救い出してくれるメシヤだったのです。イエスはそうではなかった、ローマによって処刑されたそんな方が神であるはずがないと、これが救い主に対するユダヤ人の思いだったのです。もうひとつは間違った選民意識です。自分たちだけが神から選ばれ、神のご恩寵を受けるに値する者だと思っていました。だから、異邦人が救われることにねたみを持ったのです。

2) ギリシャ人の思想、神観です。肉体の復活、イエスの復活を愚かなものとして信じません。神は何も感じない、何もしない存在、どんなものにも影響を受けない存在だと言います。

パウロが伝えたのは唯一の神、人となられた神、死んでよみがえられた神です。十字架のイエスを宣べ伝えたのです。しかし、ギリシャには「愚かなこと」でした。このような障害の中でパウロはこの後、コリントへと行きます。そして、約1年半そこに滞在します。そこでパウロは神から励ましを受けます。使徒18:9, 10「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れないう、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。』』と言われた。」と。これはパウロに必要な励ましでした。

また、コリントに着いたばかりのパウロのもう一つの不安材料というのは、シラスとテモテのことでした。ペレヤでもねたみにかられたユダヤ人の迫害があり、その中にいるふたりの安全を気遣ったのです。一刻も早く来るようにという命令を残してパウロはアテネへと行きました。そこからコリントへと来たわけですが、パウロは少しでも早く彼らに会いたいと思っていたのでしよう。このような思いもあって、パウロの心は不安の中にあつたようです。しかし、このパウロの不安・恐れの原因を見たとき、私たちがもつそれとは少し違うようです。私たちはともすれば自分自身への不安です。どのような目にあうのだろうか、どんな犠牲を払うのだろうか…。けれども、パウロはそれよりも人々が悔い改めないことに心砕いていました。

このような中でパウロの選択はどのようなものでしたか？

II. パウロの決意 2:2-5

もう一度、1コリント2章に戻り2節、「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」とパウロには選択肢があつたのです。それは、十字架と復活を語るか語らないかです。パウロは会堂に入ると福音を語ります。迫害、障害があつても、特に、ユダヤ人に福音を語って行きました。パウロは誰よりも同胞であるユダヤ人の救いを願っていました。ローマ9:3「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」と。しかし、パウロが語るほどに反発が起こります。救い主が十字架にかかることなど考えられない、受け入れられないと。しかし、パウロは語り続けるのです。「すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。」と、十字架につけられたイエス以外は語らない、これがパウロの選択でした。人間的にすばらしい知識に頼って語ること、人々もそれを求めがちです。教会においても、罪について、悔い改めについて触れないことが多々あります。パウロは言います。「…後の時代になると、ある人は惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」(1テモテ4:1)、「真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」(2テモテ4:4)。

パウロは神の方法を選びました。私たちが知るべきことは、教会に来ること、神の愛を知ること、ではなく、私たちが神の前に罪を持っていること、このままでは神に受け入れられない、罪を悔い改めることが必要であり、それなくしては神の救い、神の愛をいただくことはできないのだということです。神に頼らなくても生きてゆける、自分で考え決めてゆける、それが人間の問題です。行いではありません。彼らが神を拒み、神を受け入れない、神を必要としないことに問題があるのです。2:4, 5を見ましょう。「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」。十字架と復活は反発を招くかもしれませんが、それを語らないで救いは与えられないのです。人は自分の力で自分を救うことはできません。私たちのうちにある罪を清算することが必要です。それには、救い主の死という大きな犠牲が払われることによってなされたと信じることです。また、神はどんなことでもできる方であると知ることです。

神のメッセージをその通り語ること、そこから何も引かない、何も足さない、それが福音をゆだねられた者の責任です。私たちが神を喜ばせるために語るのです。1テサロニケ2:4「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」とパウロが言っている通りです。

III. 神に従う者への祝福 6-9節

「しかし私たちは成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。7 私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。

8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

ここからパウロは、「私たち」と自分から離れて語ります。そして「知恵」を肯定して語るのです。「成人」とは目標に達したものの、神の願っておられる目標に達したものの、つまりクリスチャンを指しています。パウロは言います。クリスチャンでない人たちには自分は知恵を語らない、愚かと言われようと十字架と復活を語るのだと。しかし、教会にあってはそうではない、教会で語られるべきことは「神の知恵」だと言います。それは時代によって移り変わって行くものではなくずっと通じる価値あるものです。

そして、それまでは隠されていた奥義を教会の人たちは語ります。旧約では知らされていなかったメッセージを、パウロを通して私たちは知らされています。神は永遠の初めから私たちを救おうと決めておられたされたこと、そのためにイエス・キリストを遣わして罪の贖いをしようとご計画されたこと、このすばらしい恵みのメッセージを語るのです。私たちは救いにあずかるだけでなく、この救いのメッセージを語る事ができるのです。

エペソ2:3にはこのようにあります。「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」。永遠の滅びに至って当然の私たち、何の価値もない私たちを救うためにイエスは犠牲となってくださった、これが神の一方的な恵みです。神の犠牲(ひとり子を十字架につける)は私に払われたのです。9節はイザヤ書64:4からの引用です。「神を待ち望む者のために、このようにしてくださる神は、あなた以外にとこしえから聞いたこともなく、耳にしたこともなく、目でみたこともありません。」と、このような恵みを与えてくださるのはこの神だけだと言います。その通りです。この神を私たちは語って行くのです。この恵みを受けたものとして大胆に正しく語って行く責任が

あるのです。私たちがもし周りの反発を恐れながら語るなら、その福音は決して正しいものではないでしょう。神に喜んでいただけることを願って語って行きましょう。